

2. 日露戦争時の戦場で偵察用に作製・使用されたと推定される地図について

金 美英（大阪大学・院生）

編集者の注

長岡正利氏（現日本地図センター）より、日露戦争の戦場で描かれたと考えられる地図がインターネットオークションにでているとのメールをいただいたのは2007年10月のことであった。早速サイトを確認し、サンプル画像をみたが、どのように考えるか最初はとまどった。画像からすると、たしかに戦争の現場で作製された地図のようにみえる。しかし、そうした地図がこのような売られ方をするのだろうかという疑問がわく。その一方で、この種の地図も外邦図の一つであることに気づく。さらに、関連する報告は知る限りほとんどなく、しっかり性格を検討すれば、興味ある学術資料となる可能性があると考えられるにいった。ともあれ、まず入手して、現物を見ることから始める以外にない。

問題は価格である。この種の地図は古書店のカタログに出ることはまずなく、市場価格がわからない。そうした地図について、確実に入手でき、しかもできるだけ低い価格を考えるというのは、難しいことである。また科学研究費をつかって、こうしたオークションで地図を購入するという自体もはじめてのことである。

何とか落札でき、現物が到着してさっそく確認したところ、作製者（軍人）の名前や位階、作成年月日がいっているものがいくつかあり、その性格を判断する手がかりは少なくないことが判明した。こうした地図を大阪大学文学研究科人文地理学専門分野の大学院生に話したところ、中国人留学生の金美英さんが取り組んでみたいということになった。金さんは博士前期課程に在学中で、当時の軍人用の測量術書や『明治卅七八年日露戦史』など関係資料を参照して検討した結果を修士論文として提出した。吉林省の朝鮮族出身の金さんは、地図に描かれた地域をのちに作製された地形図と対照するだけでなく、『明治卅七八年日露戦史』の記載によって、これが作製された状況を確認し、軍人用の測量術書を参考に測量の方法についても検討した。また朝鮮語・日本語だけでなく中国語もできる金さんは、地図にみえる地名表記も検討することとなった。この作業のおかげで、これらの図は、日露戦争の戦場で作製され、使用された図と考えてさしつかえないことが明らかになったのは大きな成果である。

この原稿は、金さんの修士論文「日露戦争の戦場で作製・使用された地図について」のうち、とくに地図の特色の検討部分を速報的に示そうとするものである。地図の画像にくわえ、それが描く場所に対応する地形図、各種資料からわかる留意点を示している。この種の地図の検討は始まったばかりであり、地図の見方や分析法もこれから考える必要がある。この報告を読まれる方には、地図をよくご覧いただき、ご意見やコメントなどあればお知らせいただきたい。この報告は、今までほとんど知られることのなかったこの種の外邦図に関する最初の検討なのである。

なお、印刷用の原稿作成にあたっては、金さん執筆の原稿をわかりやすくするために、若干の修正を加え、さらに金さんが修正をくわえたことを付記しておきたい。

また、ここに印刷する図はモノクロで細部についてはわからない点が多い。カラー版については、下記の URL からご覧いただきたい。

外邦図研究プロジェクト <http://www.let.osaka-u.ac.jp/geography/gaihouzu/>

（小林 茂）

I. はじめに

日露戦争当時、地理情報の少ない戦地について、日本軍は地図の整備に努めた。この地域について日本軍は、すでに 1880 年代に行われた陸軍将校の実測によるもの（縮尺 20 万分の 1 で、その多くは「路上測図」によったと考えられる、山近・渡辺 [2008]、小林ほか [2008] 参照）や日清戦争を契機として編成された臨時測図部（第 1 次）作製の地図などを整備していたが、地図情報はなお大きく不足していたと考えられる。

日本軍が戦地で整備しようとしていた地図は、大きく分けて以下の 3 種類に分けることができる。一つめは臨時測図部（第 2 次）によるものである。日清戦争時に編成された臨時測図部は、日露戦争時にも編成され、陸地測量部の技術者を中心とした測量を行った。ただしここで注意しておかねばならないのは、臨時測図部の測量は、戦闘が行われている前線の地域ではなく、その後方のより安全な地域を対象としており（野坂ほか 1944 ; 小林 2009）、むしろ将来また戦場となる地域の地図作製をめざすものであった点である。二つめは、「分捕地図」といわれるもので、ロシア軍の将校が携帯していた地図を捕獲したものである。こうした地図については、日露戦争に従軍した将校である多門二郎の『日露戦争日記』（多門 2004: 84, 254, 288）にもしばしば登場する。前線だけでなくロシア軍の支配する後方地域についても貴重な情報をもたらすので、戦場に残されたロシア軍の地図資料は積極的に探索された。三つめは前線の戦闘地域について、将校や下士官によって作製された地図である。前線の地形や集落、道路などを簡略に記載するもので、偵察によって作製されたと考えられる。1905 年 4 月に下士官に昇任し、分隊長となった新潟県出身の茂沢祐作 (1881-1946) は、その日露戦争従軍記のなかで、偵察に際し「記憶測図」を行い、また宿営地の「路上測図」を行ったほか、前線の衛兵所勤務の報告として略図を提出したと述べている（茂沢 2005: 207, 210, 211）。本報告で検討する地図の多くは、こうして将校や下士官によって作製されたと思われるが、図に記入されている作製者の位階はいずれも将校である。また、一部に

臨時測図部が作製したと考えられるものもみられる。なお、上記茂沢の従軍記には、地図の「謄写」作業にふれる箇所が散見し（茂沢 2005: 61, 91, 111）、これが戦場の部隊の日常業務の一つであったこともうかがえる。

将校や下士官による戦場での地図作製を考えるに際し、まず留意されるのは、彼らがもっていた測量技術である。明治維新以後、陸軍将校あるいはその候補者が地形や測量に関する知識や技術を習得することにむけて、測図教育用の書物が出版されている。これらの書物のうち、国立国会図書館に所蔵され、日露戦争以前に発行されたものだけで 33 冊が確認される（表 1）。その内容から、戦場あるいは将来戦場となると予想される地域で行う、迅速かつ簡易な測量に関する教程あるいは参考書であることがわかる。この中で最初に発行されたのは、英語の原本の漢訳をさらに和訳した『行軍測繪』（1876 [明治 9] 年）である（小林・渡辺 [2008] 参照）。陸軍将校はこれらの書物をもとに演習を行い、測図の技術を身につけた後、自ら地図を作製したと推測できる。

また日露戦争当時、専門的技術を習得している将校や下士官について、これを役立てることが奨励されており、その中に「測量製圖に關する業務」が含まれている点も留意される（陸軍大臣寺内正毅 1904）。兵器や火薬の製造、鉄道の建設や電信に関する業務とともに、地図作製についても専門技術をもつ者の動員がはかられていた。

将校や下士官による簡易な測図法については「迅速測図」、「路上測図」、「目算測図」、「記憶測図」などの名称がある。この具体的な内容や使用された測量器具については、今後さらに検討する必要があるが、現在のところ、「迅速測図」は基本的に平板測量によるもの（陸軍省 1893: 251-254）、「路上測図」は画板のような携帯測板上に貼り付けた方眼紙に、コンパスおよび歩測ではかった通過経路の方位および距離を記入していくもの、さらに「目算測図」は現場でのスケッチによるものと考えられる。白幡（1892: 87）では、閉合するかたちで導線法を適用して測量した測点に囲まれた地域について、これを目印にスケッチにより地物の位置を記入する方法をさして「目算測圖」という語を用いている。戦場では、

こうした測点を設定すること自体困難で、ほとんどはそれなしのスケッチであったと考えられる。「記憶測図」は、現場でスケッチをおこなう余裕もない状態で地形などの観察を行い、安全な場所にもどってから記憶により作図する場合をさしていると考えられる。精度の高い測量には、時間をかける必要があり、また精密な測量器械も必要である。日々変化する

る戦場では、簡略な「目算測図」のような方法に頼らざるをえなかった場合が多いと考えられる。

なお、その他の測量法の名称として、臨時測図部の行った「碎（細）部測圖」、「線路測圖」がある。両者とも平板測量を主体とし、後者はそれによるトラバース測量をさすと考えられる。

表 1. 日露戦争以前における兵用測量書

No.	書名	発行年	著者	発行
1	行軍測繪	1876 (M9)	陸軍文庫	陸軍文庫
2	兵要測量軌典小地測量之部	1881(M14)	陸軍文庫	陸軍文庫
3	陸軍省年報 第 7,8 年報	1881,1883 (M14,16)	陸軍省	陸軍省
4	測繪活用	1882(M15)	著者不明	出版社不明
5	山地路上測圖活用法	1886(M19)	歩兵中尉生田清範	小松隆範
6	測量教科書巻 1~3	1887~1888 (M20~M21)	ウィルリヤム・ギレス ピー著 野村龍太郎・原龍太抄 翻訳	攻玉社
7	兵要迅測圖指針	1888(M21)	中島康直	内外兵事新聞局
8	軍人讀本	1889(M22)	河井源蔵著	有則軒
9	工兵操典 巻 10 (測地之部)	1889(M22)	陸軍省	川流堂
10	實用測量新書	1890(M23)	横山彦次郎, 小瀬佳太郎	内田正義
11	野戰砲兵下士野戰教程	1891 (M24)	著者不明	兵林館
12	歩兵軍事一斑 第 2 冊	1892 (M25)	上野勘次郎編	上野勘次郎
13	簡易測圖法	1892(M25)	白幡郁之助編	千城社
14	歩兵野外勤務 第 3 冊 路上測圖ノ部	1892 (M25)	河井源蔵編	有則軒
15	工兵操典 第 5 冊 7 編	1893(M26)	陸軍省	川流堂
16	兵要集	1894(M27)	神代賤身編	神代賤身
17	速成測量學	1895(M28)	城豪編	城豪
18	兵卒教授書	1896(M29)	余語征信	近藤喜保
19	歩兵軍事摘要	1896 (M29)	福田力之助編	東崖堂
20	野戰砲兵野戰教程	1896 (M29)	著者不明	兵林館

21	地形學教程 第3版 卷1-3	1896(M29)	陸軍士官学校編	陸軍士官学校
22	戦術綱要 2版	1898(M31)	軍事鴻究学会	有則軒
23	地形測圖法式草案 經常測圖ノ部	1899(M32)	陸軍参謀本部 陸地測量部	偕行社
24	田名部近傍路上測圖	1900(M33)	歩兵第五聯隊	歩兵第五聯隊
25	一年志願兵志望者 必携軍事學大要	1900(M33)	広嶺忠胤著	広嶺忠胤著
26	測圖學教程	1900(M33)	教育総監部	教育総監部
27	地形測圖法式	1900(M33)	陸軍参謀本部 陸地測量部	陸軍参謀本部 陸地測量部
28	略測圖教科書	1900(M33)	本間資鉄編	小林又七
29	軍隊學術幹部須知 下巻	1902(M35)	陸軍歩兵少尉 宮本林治殿編	鐘美堂
30	測圖学教程	1903(M36)	教育総監部	教育総監部
31	幹部必携測圖指針	1903(M36)	沢木外雄著	川流堂
32	戦地測繪	出刊年不明	参謀本部	参謀本部
33	路上測圖教程 (大阪大学所蔵)	出刊年不明	著者不明	発行者不明

注：国立国会図書館の近代デジタルライブラリー (<http://kindai.ndl.go.jp>) をもとに作成 (M：明治)。

II. 本図群の概要

つぎに、大阪大学がインターネットのオークションで購入した地図群 (以下本図群とする) について検討する。日露戦争の戦場で作製・使用されたと思われる本図群 (大阪大学文学研究科人文地理研究室所蔵) のそれぞれが、いつ、どの作戦のために、どのような方法で作製されたのか、などについて分析を試みたい。

本図群の構成は表2の通りである。各図の名称には、「略圖」、「目筈並記臆測圖」のようなものがみられ、緊迫度を増す戦場において、簡単な測量器械を利用して短期間にスピーディに作製されたことがうかがわれる。ほとんどが簡略な地図であることも、これに一致する。他に⑪「威遠堡門」(秘)、⑫「昌図」(秘) など、標高点の記入をとまなう、より本格的な測量によって作製されたことが明らかな地図もある。

本図群にあらわれる地名が示している場所は、現中国遼寧省 (旧奉天省) 鉄嶺市の昌図県、開原市、西豊 (掏鹿) 県および瀋陽 (旧奉天) 市の康平県の一部地域、吉林省の吉林市、長春などの地域である。つまり、大半の測図エリアは瀋陽 (旧奉天) 市以北である。これらの地域は物資輸送の軸である東清鉄道が通っており、本図群は巨視的にはこの鉄道沿線周辺を描いていることになる。

本図群の中で、作製者がわかるのは6枚であり、それはすべて関係師団の参謀部および陸軍将校によって作製されている。作製時期が明記されているのは3枚だけで、奉天会戦が終わった1905 (明治38) 年3月10日以後のものである。その他の図についても、測図エリアから奉天会戦以後に作製されたと推測される。

以下では、本図群の昌図および威遠堡門附近の16枚 (表2のNo.1~No.16) について、『旧満洲五万分之一地図集成』所収の地形図 (陸地測量部・関東軍測

表 2. 大阪大学文学研究科人文地理学教室蔵 日露戦争関係地図 目録

No.	名 称	年 紀	作 製	縮 尺	サイ ズ (cm)	印刷状況
1	「前馬石堡附近之略圖」			2 万分 1	24.1×33.0	手書き
2	「威遠堡門附近之圖」			2 万分 1	48.6×33.8 ①24.3×33.8 ②24.3×33.7	手 書 き (筆)
3	吉林街道 (仮称)				46.4×35.4	謄写版
4	「二道河子附近之圖」			2 万分 1	32.4×46.7 ①24.0×32.2 ②32.3×15.0 ③8.4×32.2	手書き 一部鉛筆 書き
5	「見取圖」(南城子付近)	明治 38 年 6 月	第十師団参謀部製 歩兵少尉大倉熙	5 万分 1	33.5×47.1 ①33.5×24.3 ②33.5×24.2	カーボン
6	「見取図」(歡喜嶺付近)			2 万分 1	24.6×33.5	カーボン
7	(断片) 涼水泉子～神樹 堡				24.4×33.5	カーボン
8	「陶鹿附近略圖」			5 万分 1	24.2×62.1 ①24.2×32.5 ②24.0×33.0	謄写版
9	(断片) 陶鹿城付近				24.0×8.9	謄写版
10	「孤榆樹附近目算並記 臆測圖」	明治 38 年 6 月 23 日	第十師団参謀部 歩兵第三十九聯隊 第二中隊長歩兵中 尉村岡俊太郎	約 5 万分 1	24.4×33.0	謄写版
11	「威遠堡門」 (秘)		臨時測図部?	5 万分 1	47.0×33.3	カーボン
12	「昌圖」 (秘)		臨時測図部?	5 万分 1	47.3×33.3	カーボン
13	「昌圖停車場附近補足 圖」	明治 38 年 5 月	第四軍参謀部	20 万分 1	19.1×18.0	石版印刷
14	「沙河子附近之圖」		第六、第十師団参謀 部製版	約 4 千分 1	43.8×33.3 ①22.0×33.3 ②23.3×33.0	謄写版
15	「昌図及威遠堡門貼付 図」		第六師団参謀部製 版	5 万分 1	33.3×43.2	カーボン
16	(断片) 東清鉄道～石虎 子～孤榆樹				24.0×33.5	謄写版
17	「康平西北方補足圖」		総司令部	20 万分 1	33.7×24.2 ①33.7×24.2 ②12.2×5.1 (台形)	カーボン

18	「海龍及英額城」			20 万分 1	51.2×80.3 ①～③各 24.4×33.4 ④8.7×33.4 ⑤33.4×17.9 ⑥33.4×17.8 (L字型) ⑦9.0×15.2	青カーボン
19	吉林 (仮称)			20 万分 1?	39.5×42.0	カーボン
20	黄堡石炭坑付近 (仮称)				65.1×48.0 ①～④各 33.0×24.5	手書き
21	長春 (仮称)			20 万分 1	46.0×80.3 ①24.4×62.5 ②21.9×83.0 ③24.1×20.5	圖の写し
22	遼源附近 (仮称)				39.6×33.0 ①24.3×33.0 ②15.5×33.0	カーボン
23	昌図付近小縮尺図 (仮称)				39.7×78.2	カーボン

注 1) 「昌圖停車場附近補足圖」は騎兵第六聯隊の測圖を基として調製するものにして総司令部 20 万分 1 に貼付すべきものとしている。

「康平西北方補足圖」は第三軍參謀部において調製されるものにして総司令部 20 万分 1 昌圖に貼用する。

注 2) カーボンはカーボン紙による複写を示す。

注 3) 丸数字は、複数の紙が接合されていた図が分離している場合の、各葉のサイズを示す。

量隊作製 1932～1935 年製版) と比較しながら解説していく。

上記 16 枚の図の測図エリアは、図 1 の斜線部分に該当する。斜線部分は 5 万分 1 の地形図 6 図幅(查罕牛泉・昌圖縣・双廟子車站・威遠堡門・馬市堡・大慶陽)からなっており、その地図 6 枚を繋ぎあわせ、その上で各図の測図エリアを確定した。上記 16 枚の図は、一部測図エリアが重なるものもあれば、繋がるものもある。縮尺は、2 万分 1 および 5 万分 1 であり、大半は日露戦争時、最前線において陸軍将校が作製していたと考えられる。上記 16 枚の図の測図エリアに関し、5 万分の 1 地形図と比較すると、多くは精度が低いことが明らかである。経緯度や標高

点は、ほとんどで表示されていない。

以下では、上記 16 枚の図はどのような状況で作られたのか、あるいはどのような作戦で使用されたと考えられるか、当時の日本軍とロシア軍の戦闘記録を踏まえてその背景にアプローチする。

なお、奉天会戦(1905 [明治 38] 年 3 月 1 日～同 3 月 10 日)以後の日本軍は、鉄嶺を攻め落とし、長春に攻め入り、さらにハルピンを占領することをめざしていた。そのため、小支隊を主に奉天以北の地域に進出させ、ロシア軍との小規模な戦闘が絶えなかった。表 2 に示した図はその過程で作製されている。

16 枚の図のうち、No. 1～No. 11 については、昌図東方の吉林に向かう道路に沿った地域を描いてい

る。この地域の戦闘の焦点になったのは威遠堡門という集落で、以下、威遠堡門グループの図と呼ぶことにしたい。これに対してNo. 12~No. 16は、昌図

を中心とする地域の図であり、昌図グループの図と称することにする。両グループの図が描く地域の位置関係については、図2を参照していただきたい。

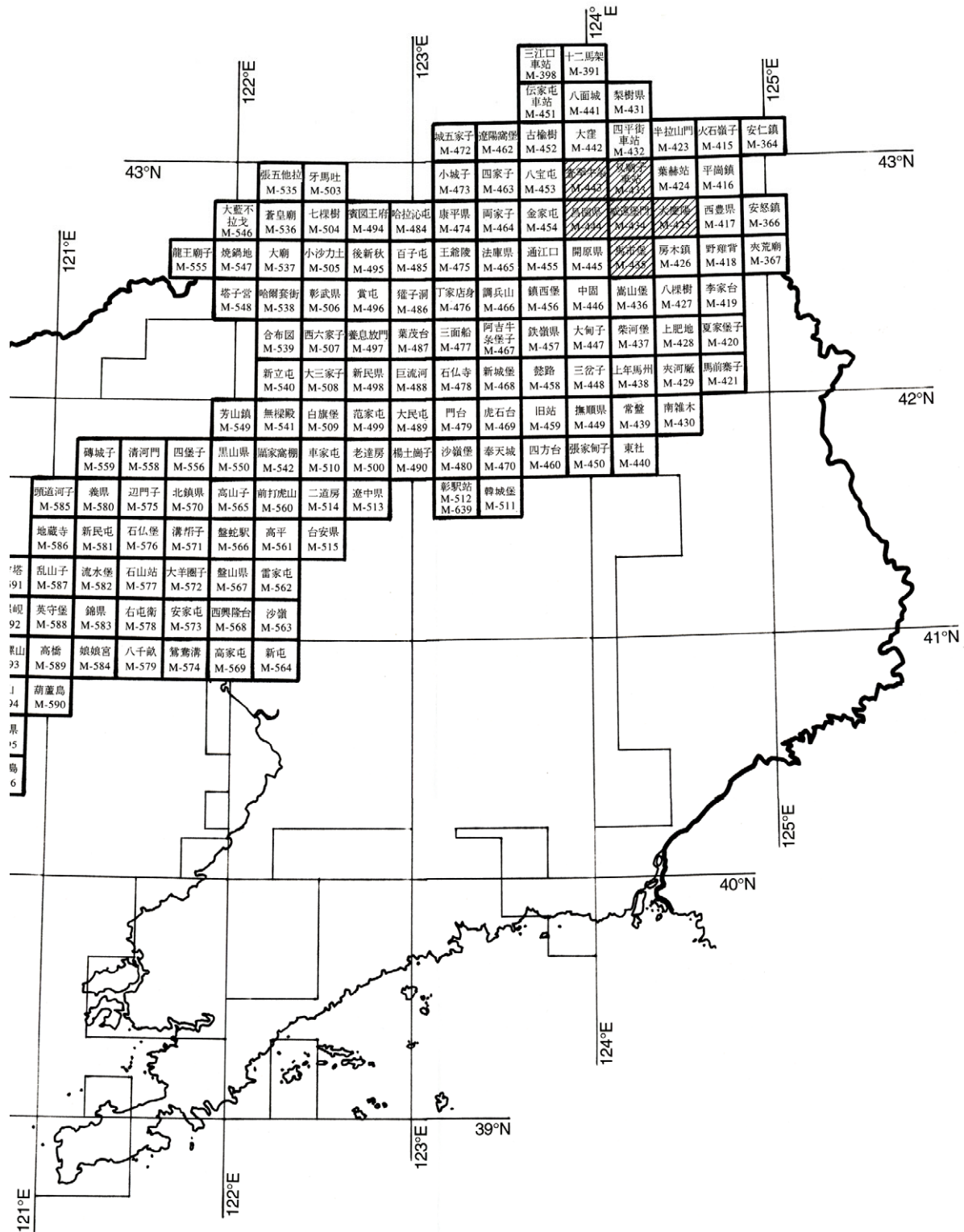


図1. 遼東省索引図

出典：中国大陸地図総合編纂委員会（2002）の索引図を一部改変して作成。

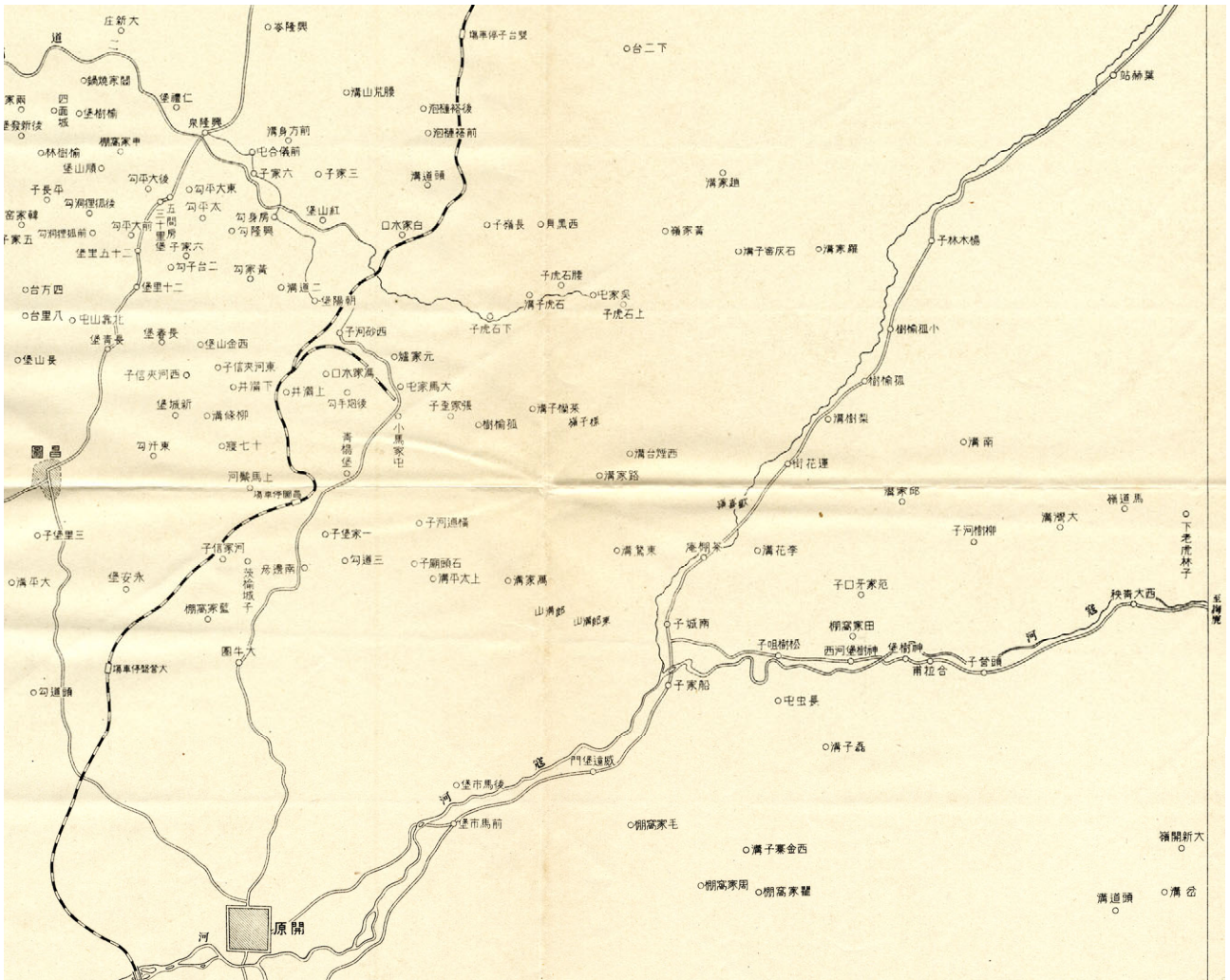


図 2. 昌図附近之一般圖

原図 (20 万分の 1) × 0.66.

出典：参謀本部 (1914b) の附図第十六 (部分)。

Ⅲ. 威遠堡門グループの図

吉林へ向かう道路に沿う地域を描く威遠堡門グループの図について、表 2 では、より南方の地区を描く図から北方を描く図へと順に配列している。以下この順で検討をくわえることとする。

なお、参謀本部編纂 (1914a,b) により、この地域における 1905 (明治 38) 年の 3~6 月の戦闘の経過を示したのが表 3 である。3 月下旬に威遠堡門を占領して以後、4 月になって日本軍は北に向かって孤榆樹附近まで進出するが、ロシア軍はこれに反撃して南進する。

ロシア軍の大きな攻勢は 2 回あり、第 1 回目は 4 月 11 日である。午前、ロシア軍の歩兵約一中隊、騎兵五、六十人は茶棚庵に進入し正午頃、砲四門で襲撃を開始した。さらに、南城子および船房 (家) 子附近を射撃するとともに、茶棚庵からロシア軍の歩兵 3 百人、騎兵約 2 百人が漸次南進してきた。そのため、南城子にいた歩兵第三十九聯隊第二中隊および騎兵第十聯隊第二中隊、騎兵第六聯隊第三中隊は斥候部隊を船房 (家) 子、馬家林子の附近に配置した。それ以外は二道河子に退却した。その際、ロシア軍は南城子およびその西方に停止していたが、南進せず日没の前に蓮花街に戻る。これによって、

表 3. 威遠堡門付近における日本軍の活動（1905 [明治 38] 年 3～6 月）

月 日	日本軍の活動	頁
3月 21日	第四軍第十師団騎兵、威遠堡門を占領	2
4月 3日	第十師団独立騎兵、歡喜嶺に進出、翌日蓮花街を占領	29
4日	同、孤榆樹を占領	34
5日	同、ロシア軍の攻撃のため威遠堡門へ退却、一部を南城子に残す	38
7日	同、威遠堡門の防御工事を行う	43
11日	ロシア軍、茶棚庵に進出、日本軍は一部を船家子付近に残し二道河子に退却、ただしロシア軍が蓮花街付近に退却したので、日本軍は南城子を再占領	49
22日	ロシア軍の攻勢により、日本軍は一部を威遠堡門付近に残して開原站へ退却、前進したロシア軍は後馬市堡を占領	57-61
23日	ロシア軍の攻勢つづき開原站にせまるが、夜になって威遠堡門南方に集合し孤榆樹付近に退却	64-69
24日	日本軍反撃、威遠堡門を占領、拘鹿・蓮花街方面を偵察	81
5月 3日	第十師団は威遠堡門附近を守備	101
20日	蓮花街方面のロシア軍南下、日本軍の前線の兵は二道河子、船家子に退却	152-153
21日	以後毎日ロシア軍の攻撃と撤退（蓮花街へ）	153
23日	日本軍南城子附近で敵情を搜索	157
6月 7日	ロシア軍は孤榆樹・蓮花街付近にあり、凉水泉子・南城子北方の高地を占領	165
19日	第十師団の一部は南城子を出発して蓮花街を占領	185
21日	南下するロシア軍と戦闘、ただし大きな変化なし	188-191

注：頁数は、参謀本部（1914a）の頁数を示す。

17時40分、歩兵第三十九聯隊第二中隊および一部の部隊は再び南城子を占領したのである（参謀本部 1914a: 49）。

第2回目は4月22日、茶棚庵にいたロシア軍は南城子の第十師団独立騎兵団の搜索隊（騎兵第六聯隊第二中隊、歩兵第三十九聯隊第二中隊）に向けて攻撃を開始した。10時40分、ロシア軍の斥候部隊は日本軍の搜索隊の退却を迫り、南城子に侵入し漸次兵力を増加した。14時頃、そのロシア軍の歩兵約二中隊が呉家屯西方高地、15時頃には五中隊が二道河子東北高地より本道の西方地区に散開し南城子附近より東方に前進した。ロシア軍の部隊が船房（家）

子附近に迫って来たため、第十師団独立騎兵の搜索隊はさらに威遠堡門に退却した。日本軍は威遠堡門、二道河子および前馬市堡附近に拠守したが、16時頃ロシア軍が威遠堡門を占領した。さらに、18時には四家子（前馬石 [市] 堡東部）附近も占領した。そのため、第十師団独立騎兵は開原に退却することとなった（参謀本部 1914a: 57-59）。

これに対し、すぐに反撃した日本軍は、再度威遠堡門を占領し、5月以後は一進一退の状態が続くことになる。

以下では、こうした経過をふまえながら、8枚の図を検討することとする。

① 「前馬石堡附近之略圖」(図3)

本図はここでとりあつかう 12 枚の図のなかで、最も南方の地域を描くものである。この北側に隣接地域については、②「威遠堡門附近之圖」(図5)が描いている。戦闘の経過のなかで、前馬石(市)堡は、一時期野戦倉庫が設置され、兵站上でも意義のある地点となった(参謀本部 1914a: 977)。

対応する地域の地形図である図4と比較すると、道路および河川の形や土圍の位置などは位置関係な

どがよく対応し、つぎにみる②「威遠堡門附近之圖」(図5)などとはちがって、「路上測図」のような精度のやや高い方法を用いて作成されたと考えられる。

この他、図4にみえる地名と比較すると、相違点がみとめられるが、中国語の発音は非常に似ている。廖家窪 [wa] 子と廖家凹 [wa] 子、羊 [yang] 馬大屯と養 [yang] 馬大屯、塔 [ta] 子溝と搭 [da] 子勾がその例である。

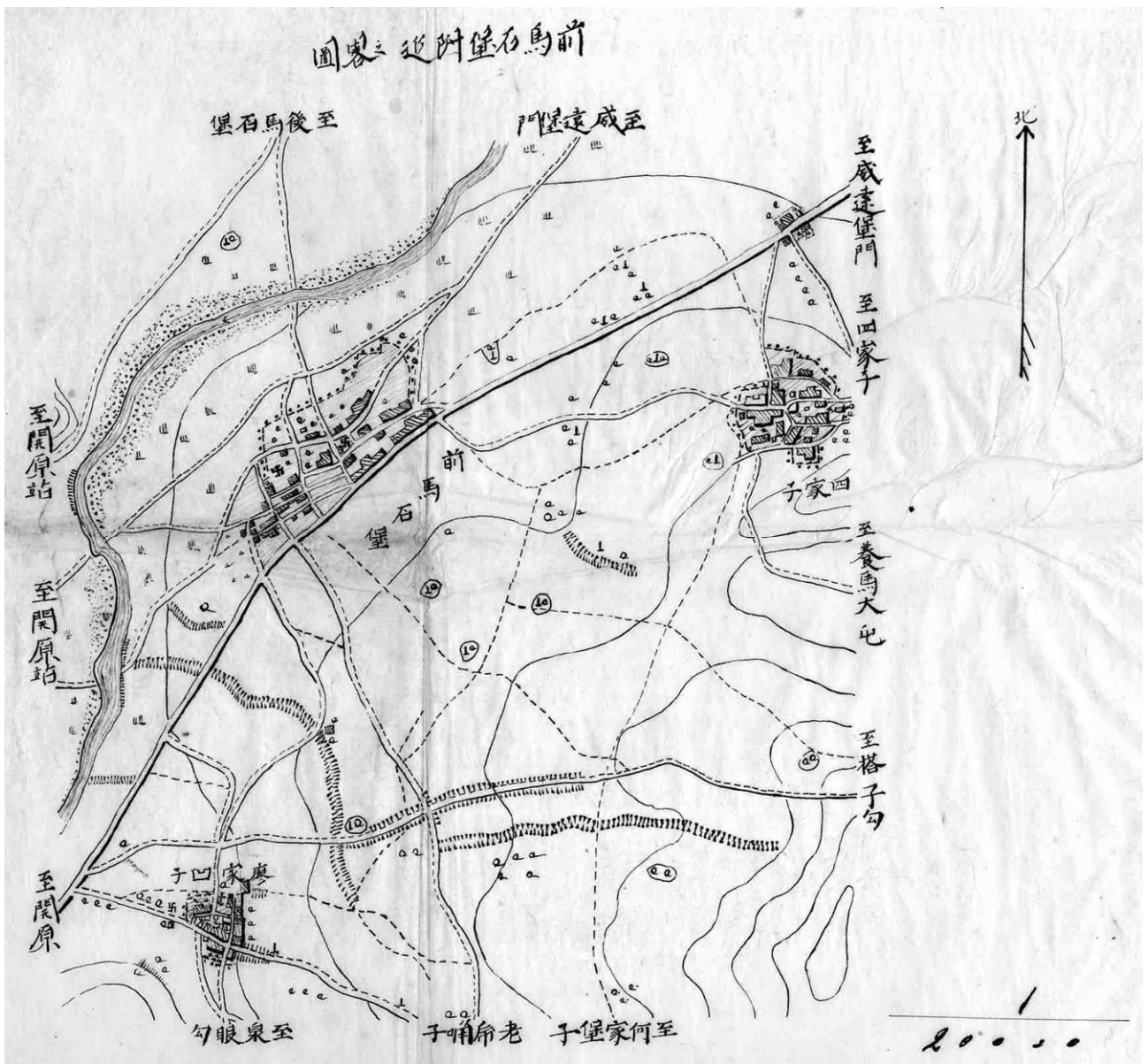


図3. ①「前馬石堡附近略図」(2万分1)

原図×0.79。



図4. 前馬市堡 (5 万分 1 地形図「馬市堡」図幅)

原図×1.34。

出典：陸地測量部作製 (1985) (1932 年製版)。

② 「威遠堡門附近之圖」(図5)

本図の南側には、上記①「前馬石堡附近之略図」(図3)が接続する。また威遠堡門の集落より北東方については、つぎで紹介する③吉林街道(仮称)(図7)④「二道河子附近之図」(図8)の測図エリアと重なる。

威遠堡門が最初に日本軍に占領された経過は、つぎのようなものである。第四軍第十師団前田支隊は、1905(明治38)3月20日、ロシア軍の兵力(歩兵一旅団、騎兵1千人)が昌図南方の左家勾、磚城子附近に宿営しているのを確認し(図2参照)、同師団独立騎兵の一部を昌図附近の露軍と接触させ、主力をもって伊通方向に前進し、吉林、長春方向のロシア軍の状況を捜索しようとした。そのため、3月21日、同騎兵は威遠堡門に到着し、午後2時に当地を占領

した(参謀本部1914a:2-3)。その後、上記のように威遠堡門は、日本軍とロシア軍が交互に占領することとなった。

本図の示す道路のパターンなどは、参謀本部(1914b:附図第三)による図6と比較するとよく対応するとはいえない。その点から本図は、目算測図のような方法で作製されたと考えられる。他方、まわりの丘陵については、屈曲に富んだ等高線が描かれているのも注目される。

本図の大きな特色は、中央の威遠堡門の集落附近には青鉛筆で掩体(┌──┐)や散兵壕、鹿柴(×××)など防御施設が記入されていることである(これらの記号については参謀本部[1914b:軍隊符号]を参照)。また類似の防御施設が、まわりの丘陵の高所などにもみられる点も留意される。こうした防御施設の設